



御前峰とクロユリ

1

白山国立公園とは

●“質”に優れた山岳国立公園

白山国立公園は平成24年、国立公園*の指定から50年を迎えました。石川をはじめ富山、福井、岐阜の4県にまたがるこの山岳国立公園は、豊かな自然が残る地で、総面積は49,900haあります。

富士山、立山と並び「日本三名山」のひとつに挙げられる白山は、山頂部が御前峰、大汝峰、剣ヶ峰の3つからなり、2,000m級の山々が連なっています。古くから人々にとっての信仰対象で、御前峰の山頂には白山奥宮があります。

白山国立公園の広さは、全国で30ある国立公園のうち15番目ですが、そのうち、原生自然が残る「特別保護地区」の面積は全体の35.8%を占め、5番目の広さです。それ以外の地域も、公園の風致を維持するために一定の行為について許可が必要となる「特別地域」(第1種～第3種)の指定を受けており、白山は、大変貴重な自然が残る“質”に優れた国立公園といえます。

※国立公園…日本を代表する自然の風景地を、国が指定して管理する公園のこと。

●2億年を超える歴史

白山地域には、大陸の時代や恐竜が生きた時代、大規模な火山噴火、日本海の誕生など、2億年を超える歴史が刻まれており、それは地層を読み取ることで把握できます。中でも「手取層群」は、約1億数千万年前、白山地域がアジア大陸の一部だったときの地層で、多数の恐竜の化石が発掘されることで知られ、国立公園内でも当時の動植物の化石が多く発見されています。

白山は活火山に分類され、万治2年(1659年)の噴火以降は静穏を保っていますが、将来噴火を再開する可能性のある火山です。現在の山頂部で火山活動が始まったのは3～4万年前で、「剣ヶ峰」は約2,200年前にできた溶岩円頂丘です。山頂部に見られる大小7つの池は、ほとんどが噴火によってできた穴に水がたまってできた「火口湖」で、そのうち一番大きい「翠ヶ池」は、約970年前におきた水蒸気爆発によってできたと考えられています。

●天空の「お花畑」

白山の自然の中でも特に知られているのが高山植物です。白山は「花の山」としても知られ、これを目当てに多くの登山者が訪れます。約250種の植物が生育し、ハクサンコザクラをはじめとして「ハクサン」の名がつくものが18種を数えます。これは山の名前を冠した植物の名前の数では日本一を誇ります。白山だけに生育する固有種はありませんが、シーズンともなると「お花畑」といわれるほどたくさんの花が咲きます。中でも県の「郷土の花」(昭和29年NHK金沢放送局が選定)クロユリの群生はとりわけ見事です。また、白山を西限とする植物が100種以上あるなど、学術的にも大変重要な場所となっています。

多彩で豊かな森林も魅力です。白山の麓には、ブナを代表とする広葉樹林が広がり、その光景は「樹海美」と賞されます。特に標高1,000～1,600mには広大なブナの原生林が広がっています。さらに亜高山帯・高山帯にはオオシラビソやハイマツなどが群生しています。

そして、白山には数多くの野生動物が生息しています。哺乳類ではツキノワグマやオコジョ、ニホンカモシカなど46種を数えます。鳥類では、

石川県の鳥イヌワシをはじめ約130種が確認されており、平成21年には、約70年ぶりにライチョウが姿を現したことはメディアなどで大きく報じられました。

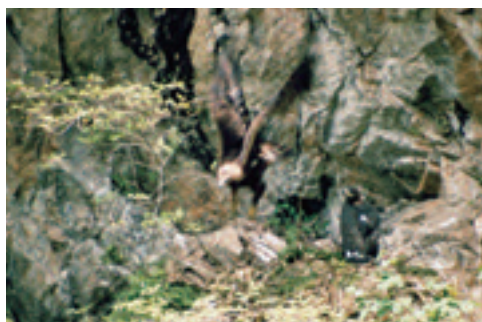
●人間にとってなくてはならない山

白山の豊かな自然の恩恵にあずかるのは、私たち人間も同じです。ブナ林は雪崩や土砂流出を防いでくれる役目を果たし、さらに雪解け水や雨水を蓄えることで大地を潤してくれています。さらに山麓の森林は食料供給の場でもあり、太古の昔から人々は狩猟を行うとともに、焼畑をして穀物などを収穫してきました。薪や炭などの燃料も採取するなど、自然と共生しながら暮らしてきました。また、白山は、信仰の山としての長い歴史や山麓で形成されてきた独特の生活様式、さらには豊かな温泉群など、多彩で魅力的な資源も有しています。

これらが国内外で高く評価され、「ユネスコの生物圏保存地域」、「国指定鳥獣保護区」、「文化庁カモシカ保護地区」、「林野庁の森林生態系保護地域」などに指定されています。私たちは、この豊かな自然と歴史・文化に恵まれた白山を、よりよい形で後世に伝えていかなければなりません。



ブナ林



イヌワシ



最大の火口湖「翠ヶ池」



ハクサンコザクラ

2

国立公園指定50周年

●熱心な活動が実を結ぶ

白山国立公園は平成24年で指定50周年を迎えました。その歴史を振り返ってみましょう。

国立公園は昭和32年に制定された「自然公園法」に基づいて指定されています。白山は昭和37年、20番目の国立公園として指定を受けました。

それに先立つ昭和30年、白山は国定公園の指定を受けています。国定公園指定当時から、国立公園への指定を目指した運動が始まり、その2年後には石川県、岐阜県、富山県、福井県が連名で国立公園指定の申請を行いました。その後も、各県知事が連名で陳情をするなど、各県、財団法人白山観光協会などが力を合わせて運動を進め、昭和37年の指定に至りました（下表参照）。

当時、関係者がどのような思いで国立公園の指定を目指したのかは、記念式典での、田谷充実石川県知事（北陸四県白山国立公園昇格促進

連絡協議会会長）の式辞に集約されているといえます。

「最近、ほかの自然公園が俗化し自然の姿が破損しつつあるとみられるとき、ひとり白山が自然保護を絶対の管理方針としてきたため、自然の美しさが無傷のまま保護されている。自然公園審議会、厚生省の決め手になったといわれている。こんごいっそう自然の保護につとめ、すぐれた原始の姿を鑑賞いただくとともに、国民の堅実な保健休養の場として、また自然科学の研究の場として運営したい」※中西陽一石川県副知事が代読、昭和37年11月20日の北國新聞夕刊より

原生林をはじめとした手つかずの自然を、今後も変わらず子孫に残し、そして各県が連携を深めながら、その豊かな自然を保護し、さらにその貴重さを国民に広く知ってもらい、憩いの場、研究の場として運営していく。そんな思いは今も着実に受け継がれています。

■白山国立公園のあゆみ

年月	できごと
昭和30年7月	白山国定公園の指定（総面積47,359ha）
昭和32年11月	国立公園指定の申請 ※申請者：石川県、岐阜県、富山県、福井県（代表：田谷充実石川県知事）
昭和35年4月	4県知事連名で陳情書を提出し、関係機関、団体を挙げて陳情
昭和36年11月	4県知事連名で陳情書を再度提出
昭和36年12月	自然公園審議会は白山を国立公園候補地とすることを厚生大臣に答申
昭和37年11月	白山国立公園の指定（総面積47,402ha）
昭和42年7月	室堂ビジターセンターの竣工
昭和44年3月	国指定白山鳥獣保護区の指定
昭和48年7月	石川県白山自然保護センター、中宮温泉ビジターセンターが開館
昭和52年8月	白山スーパー林道が開通
昭和53年3月	白山国立公園の公園計画の再検討（総面積47,683ha）
昭和55年11月	ユネスコの生物圏保存地域の指定
昭和61年	加賀禅定道の整備
昭和61年9月	白山国立公園の公園計画の点検（総面積47,700ha）
平成11年	市ノ瀬慶松平線（白山禅定道）の整備
平成12年6月	市ノ瀬ビジターセンター、白山国立公園センターが開館
平成14年5月	室堂ビジターセンターのリニューアル
平成21年10月	白山国立公園の公園計画の点検（総面積47,700ha）
平成24年5月	白山国立公園の公園計画の点検（総面積49,900ha）



昭和32年(1957年)頃の白山室堂

●整った調査体制

白山では国立公園の指定を受ける前から、県や厚生省による動植物調査が実施されてきました。指定後はより活発に調査が行われ、昭和48年に開設された、白山自然保護センターが主体となり、動植物に加えて地質、人文に関する調査・研究を継続し、新たな知見を得ると共に、その変化についてもチェックしています。

●白山の動物と先駆的な調査

白山の代表的な鳥であるイヌワシは、県鳥に指定された当時、正確な生息状況は分かっていませんでした。そこで昭和52年から本格的な調査を実施し、その生態や生息数が解明されていきました。

また、ライチョウは、白山では昭和初期に絶滅したとされていましたが、平成21年、約70年ぶりに生息が確認された雌1羽は、採取した羽毛などの遺伝子解析の結果、北アルプス・乗鞍岳・御嶽山などから飛来したものと推測されました。その後も生息が確認されていることから、白山にはライチョウが生息できる環境があるといつてよいでしょう。

哺乳類では、特にニホンザルやニホンカモシカ、ツキノワグマを対象に、昭和40年代から全国に先駆けて生態調査が実施され、現在も継続しています。得られたデータは他地域にない貴重なもので、それぞれの動物たちの保護と管理に活用されています。また、高山の哺乳類を代表するオコジョは、夏には標高2,000mから山頂

部にかけて生息し、ときどき登山道に現れ、登山者の目を楽しませてくれます。

近年の問題としては、地球温暖化の影響からか、従来生息していなかったニホンジカやイノシシが確認されるようになり、植生への影響が懸念されています。

●地球温暖化による植物への影響と外来植物対策

白山は、高山帯を有する山岳としては、日本の西端に位置し、高山帯の面積も小さいため、特に地球温暖化による影響が懸念されます。

気候変動に関する政府間パネル (IPCC) が平成19年に取りまとめた第4次評価報告書によると、今後2100年までに平均気温が1.8~4℃上昇するという予測があります。白山では、高山帯に属するのは標高約2,450mから上のわずか250m程度であり、理論上、気温が1.5℃上昇すれば白山から高山帯がなくなってしまうこととなります。高山植物は厳しい環境下に生育しているため強いと思われがちですが、実際は人の踏みつけや環境の変化などの影響を受けやすいのです。ただ、気温の上昇が植物にどのような影響を与えるかは不明の部分も多く、今後の継続調査が必要です。



ライチョウ



オコジョ (石川県自然解説員研究会 谷野喜代子さん提供)

また近年、本来は高山帯には生育しないオオバコやスズメノカタビラ、外来種のシロツメクサなどの生育も確認されており、自生種との交雑が問題となっています。これは、登山者の靴などに種が付着して運ばれたことが原因と推測されます。本県では、平成16年度からボランティアを募集し、白山の外来植物除去作業を実施しており、これまで800人超が参加し、約1,100kgを除去しました。この動きは福井・岐阜の両県にも広がり、環境省などが主体となって活動を促進させています。



外来植物の除去作業

●50周年を記念するイベントを開催

石川・富山・福井・岐阜の4県、環境省中部地方環境事務所、白山市、高山市、郡上市、勝山市、大野市、南砺市、白川村などが協力して白山国立公園指定50周年記念事業実行委員会を立ち上げ、平成24年5月から11月にかけてさまざまなイベントを開催しました。事業の基本方針は、①白山国立公園の存在価値を再確認する、②白山国立公園の将来像を描き、共有する、③白山の恵みに感謝し、守り育てる地域社会を形成する、となっています。

5月26日(土)にはキックオフイベントが、石川・富山・福井・岐阜の4県で一斉に開かれました。石川県では中宮温泉ビジターセンターの展示リニューアルオープンに合わせ、竹中博康石川県副知事や神田修二環境省中部地方環境事務所長が挨拶し、白山スーパー林道ウォークや自然観察会も併せて開催されました。

また、各県での白山講座や登山教室、禅定道



キックオフイベントでのテープカット

登山のほか、フォトコンテストや白山地域の施設を巡るスタンプラリーなども実施されました。さらに、関係団体などが主催する登山やエコツアー、カヌーツーリングなど約70のイベントも開催され、多くの参加者が白山の自然や文化を体験しました。

11月10日(土)には、メインイベントである記念式典・自然ふれあい行事が白山市鶴来総合文化会館クレインで開催されました。生方幸夫環境副大臣の式辞に続き、谷本知事(実行委員会会長)が開会挨拶を述べ、白山の豊かな生態系をしっかりと守り育て後世に伝える意欲を示したほか、自然公園関係功労者大臣表彰及び白山国立公園関係功労者の特別表彰が行われました。また、エッセイストの華恵^{はなえ}さんによる記念講演「登山の魅力、白山の恵み」や、有識者によるシンポジウム「白山の水、いきもの、信仰、文化」が行われ、50周年宣言が採択されました。参加者は白山に対する理解を深めるとともに、これからの白山に思いを馳せました。



記念式典で開会挨拶を述べる谷本知事

3 これからの白山国立公園

白山国立公園指定50周年宣言（全文）

白き神々の座、白山。私たちは古来よりその姿に畏敬と感謝の心を抱いてきました。信仰の山として大切にされてきたことや、世界有数の豪雪地帯であるために人の営みが及びにくい地域があったことから、原生林と多様な動植物が保たれてきました。

豪雪がもたらす豊富な水が越中の庄川、加賀の手取川、越前の九頭竜川、美濃の長良川となって広大な流域を潤し、この地にすむ人びとと生きとし生けるものを育む源としての白山の価値は、揺るぎないものです。

白山が開山されてから約1300年。国立公園に指定されてから50年。この豊かな自然を未来の世代に引き継ぎ、山麓で形成されてきた独特の文化を継承していくため、そして、これらの資源を有効に活用し希望と誇りを持てる地域を創っていくため、国立公園が果たす役割は、ますます大きくなっています。

人々の絆、自然に対し畏敬の念を抱くことの重要性があらためて指摘される今、私たちは、白山国立公園指定50周年にあたり、次のとおり宣言します。

- ①白山が水と命の源であることを常に意識し、清らかな水、命のつながりを大切にしたい営みを続けます。
- ②4県に広がる白山国立公園を核に、環白山地域の人々が協働して、白山の恵みに気づき感謝する地域づくりを進めます。
- ③白山国立公園の保全と適切な利用を通じて、白山が誇る自然、景観、歴史、文化を多くの人々に伝え、未来へ継承します。

平成24年11月10日

白山国立公園指定50周年記念事業実行委員会

VOICE

白山国立公園指定50周年に寄せて



「霊峰白山を未来に」

環境省中部地方環境事務所長 神田 修二

「生物多様性保全と持続可能な利用」は、地球の未来のために世界が共有する目標となり、国立公園はそのモデルとして重要な役割を担っています。殊に原生的自然を誇る白山は、生物多様性とその恵みを体感できる最適な舞台です。私たちは豊かな自然に浸り五感を駆使することで多くの発見や感動を得るとともに、自然に生かされていることに気づかされます。白山国立公園は、人と自然のあるべき共生の姿を体感し学ぶ、「科学と精神の教室」なのです。人が大自然に求める根源的なものに応えられる存在であり続けるこそ国立公園の本質です。社会の真の豊かさが模索される今、生命と精神を根底で支えてきた霊峰たる白山の継承が国立公園に託されています。



「雪が守る白山国立公園」

石川県立自然史資料館館長 水野 昭憲

国立公園の指定から数年後、この自然の価値を見出そうと学術調査団が組織され、大型野生動物の調査に参加しました。今では低山にも普通に生息するようになったカモシカが中宮温泉から上流といった山奥に少数残っていました。その後の激しい人口減少などで、山村の様子が大きく変わり、数十年後には山麓の社会がどうになっているのかは想像すらできません。それでも、白山を取り巻く約2千km²の山地の自然は、住民を苦しめてきた多雪に守られてきましたし、これからも人が容易に近づけない自然生態系の聖域であり続けることは確かでしょう。そのうえで、より多くの人々がこの自然の豊かさを享受できる山であって欲しいものです。



「雲の上の楽園」

環白山保護利用管理協会会長 深田 森太郎

白山は国立公園指定地域だけでも約5万haの広大な山岳地域に展開する公園です。点在する火口湖や噴泉塔群、高山植物の群生やブナの大樹海とそこに生息する貴重な野生動物などまさに雲の上の楽園です。また禅定道の歴史を感じさせる多彩な登山道や麓の温泉、三馬場の信仰文化など山麓には貴重な遺産が存在します。

一方、この天空の楽園は多くの人に体験してもらってこそ価値を発揮します。そのためには安全な登山道や宿泊・休憩施設の整備が欠かせません。環白山保護利用管理協会は自然と歴史を損なうことなく世界中からのゲストに白山の素晴らしさを体感してもらう活動に取り組んでいきます。